



## 「シャーマニズムの未来—見えないモノの声を聴くワザ」ご参加の皆様へ

(基調講演者:佐々木宏幹先生より寄せられた当日のメッセージ、鎌田東二代読)

この2011年度の特集企画シンポジウムで問題提起をすることになっていた私ですが、体調を崩してしまい、とても参加する状態ではありませんので、真に残念ですが参加をお断りすることにいたしました。

昨秋に体調不良となりましたが、この会の開催までに半年間もあるので、何とか改善するだろうと思っておりましたが、かえって悪化している現状です。

ご参会の先生方と皆様方に申し訳ない気持ちで一杯です。

それで私が問題提起しようと考えていた内容の骨子を以下に託しますので参考にして頂きたく存じます。

**(1)** 私に与えられたテーマは「シャーマニズムのちから」です。このテーマは多分司会を勤められる鎌田東二さんの発案だと思いますが、真に当を得て妙です。シャーマンの主な役割は「見えないモノ」つまり諸精霊の力(ちから)を借り、あるいは操って社会の災厄、不幸を除き、幸せと平安をもたらすことであるからです。

しかし、この役割は何もシャーマンに特定されるものではなく、およそすべての宗教者が必ず具えている、あるいは具えているべきものと私は考えています。

宗教の特質は超常的(スーパーナチュラル、またはスーパーヒューマン)な力への信仰にこそある。これは世界・普遍宗教であれ、原始・民俗宗教であれ差はないのではないのでしょうか。

従来宗教研究はあまりにも宗教の知的合理的な面を強調し、観念的、高踏的な装いを凝らすのに懸命であったため、宗教に欠かせない「力」が見えなくなったか、不当に貶めてしまったのは、実に残念なことでした。

**(2)** シャーマニズムは原始宗教であり、呪術の典型であると見たのは哲学者カントだけではなく、欧米知識人の一般的傾向でした。「シャーマン」、「シャーマニズム」は負のラベルを貼りつけられた不幸な用語になりました。

シャーマンだけでなくすべての宗教者に求められるのは結局「力」であるという事実は宗教儀礼の現場を見れば一目瞭然です。

タイでは高僧の姿を刻んだお守りが高額で売られています。キリスト教会では

イエスマリアの像の足裏にキスをして「力」を得ようとする人々が雲集していました(フィリピン)。日本では神道は神々の「力」によって家内安全、厄除招福、商売繁盛等をもたらそうとしますし、仏教は神道と同じように祈祷をし、死者の鎮魂と成仏を期して諸仏の「威神力」を用いています。こうした現実には高度な仏教研究やキリスト教研究はどう答えるのか。

**(3)** 日本のシャーマニズム研究は私も含めてですが、シャーマンの性格、役割の分類にあまりにもこだわりすぎてきた観があります。

シャーマンをシャーマンたらしめている「力」とは何か。この実証困難な問題はつねに遠ざけられてきました。

ただカミ・カミ・神やホトケ・ほとけ・仏は「力」をもつとして、この「力」を身に着けるためにさまざまな修行をし続けてきたのが宗教者であることは厳然たる事実です。

タイ仏教を研究した人類学者のN・タンネンバウムはこう述べています。「僧は世俗の生活を離れて仏教を実践し、戒律を遵守するから、自動的に「力」を具えるにいたる。人々は他の力のある存在(仏像・教典など)と同様に僧に布施することにより、その「力」を得ようとする」(『シャン族の世界観における守護力』1995)。

シャーマンも厳しい修行が必要です。これなくして「力」を誇示する人は霊感商法的宗教者になりがちです。

**(4)** 現代はパワースポット現象に見られるように見えないモノの力が社会現象になっていきます。また超常的な「力」は宗教のカテゴリーにとどまらず、舞踏や歌謡、アニメーションなど芸術、芸能にも顕現しています。これに参加した人たちが「力」を貰ったと言うのはその証左ではないでしょうか。

**(5)** 時あたかも、東日本大震災と原発事故により日本はまさに国難の最中にあります。人びとは「自然の「力」にはかなわない」と口にし、先端科学の頼りなさを痛感しています。

これを復興、再起する「力」はどこからくるか。「見えないモノ」の番番です。原発の現場で働く人たちの話所には神棚があるそうです。科学も技術も所詮は人、そして人はどこかで知を超えた「力」に関わらざるをえない。

このシンポジウムの盛会と円成を祈念いたします。

## 「シャーマニズムの未来—見えないモノの声を聴くワザ」

### 開催にあたってのご挨拶

東日本(東北・関東)大震災で亡くなられた方々のご冥福を深い悲しみと痛みとともに祈りますとともに、被災された方々にこころよりお見舞い申し上げます。

NPO法人東京自由大学は、大変小さな市民大学ではありますが、大いなる未来への創造の意思を抱いて、今後も、小さな市民大学なればこそできる取り組みに最善を尽くしてまいります。

放射性物質や余震のことも含め、まだ震災・災害が現在進行形です。そんな今、緊急に必要なのは、人命救助、治療と健康管理、ライフラインの確保と救援物資の輸送・供給、最悪事態回避の適切な措置(特に原子力発電所の事故)、適切な情報伝達、励ましや支え合い、避難施設の仮設、そして同時に、復興施設の建設と生活再建、心のケアへの取り組みです。中長期的には、新しい社会づくり、21世紀の新しい文明の創造、7世代先の子供たちのために残し得ることを問いかつ実践していくことが必要になります。

そのような中、NPO法人東京自由大学では創立13年の活動経験のすべてをかけて、シンポジウム「シャーマニズムの未来～見えないモノの声を聴くワザ」を開催いたします。震災への鎮魂の思いと未来への想像力・創造力のありようを問いかける所存です。

基調講演者の佐々木宏幹先生(81歳)は、被災地宮城県気仙沼の曹洞宗の寺院のご出身です。また、第一部の舞踏「モノ降りしトキ」の舞踏家・磨赤児氏は、日本最古の神社信仰をとどめているといわれる、「大物主神」(おおものぬしのかみ)を祀る神山・三輪山の麓で育ちました。その三輪山山麓には、卓弥呼の墓とも目されている巨大な前方後円墳「箸墓」があり、日本の「シャーマニズム」の発祥の地とも言えます。その磨氏の原体験を元に、鎮魂の思いを込めて、作曲家の新実徳英氏と鎌田東二の音楽、大駱駝艦の4人の舞踏手とともに舞踏公演をさせていただきますので、ご観賞くだされば幸いです。

続く、第二部のシンポジウムでは、基調講演「シャーマニズムのちから」を佐々木宏幹先生(駒澤大学名誉教授)に、またパネルディスカッションでは、パネリストとして小松和彦氏(国際日本文化研究センター教授・文化人類学・民俗学)、鶴岡真弓氏(多摩美術大学教授・ケルト図像研究)、松岡心平氏(東京大学教授・能研究)、岡野玲子氏(漫画家)にご登壇いただき、「シャーマニズム」および「シャーマニズムの未来」についてのそれぞれの忌憚ない見解を問題提起していただ

### 鎌田 東二 (NPO法人東京自由大学理事長)

き、議論します。

東京自由大学と震災との関連について、触れたいと思います。東京自由大学を設立する少し前にわたしたちは「神戸からの祈り」(1998年8月8日、10月10日)という、阪神淡路大震災で亡くなった方々や被災者への祈りと音楽と芸能・アートの催しを、神戸のメリケンパークと鎌倉の大仏(高德院)で行いました。その神戸での実行委員長を大重潤一郎氏が務めました。大重潤一郎氏は阪神淡路大震災の被災者で、復興過程の中で『光りの島』と『風の島』(1996年)を制作してきた映画人です。

1995年の阪神淡路大震災に際し、山田和尚さんとともに「神戸元気村」の活動を3年間副代表として続けてきた草島進一氏(現在山形県議会議員)もこの「神戸からの祈り」や鎌倉大仏での「東京おひらきまつり」に関わってくれましたが、その草島氏が震災直後の3月12日に、いち早く「鶴岡元気村」(NGO月山元気村と改称)を立ち上げ、支援活動を始めました。草島氏とは、1999年より7年間、毎夏、8月13日から16日のお盆の時期に、月山と山形県羽黒町月山高原牧場で「月山炎の祭り」を行なってきた仲間であり、また、出羽三山の羽黒修験の大先達の星野文敏師と草島氏は、東京自由大学の第2回目の東北夏合宿の先達・講師でもありました。そのような関係もあり、草島氏が、大地震直後の3月12日から、被災地の名取市などで炊き出しなどの支援活動をしているので、NPO法人東京自由大学は後方支援をしています。

東京自由大学は、阪神淡路大震災後、大きな「願」を持って、「いのちの声を聴く大学」として設立しました。自由な学問的探究と自在な芸術的創造を2つの柱として、各自の根源的な自由と自立の霊性を探究し自己教育していく場が東京自由大学であると意識しつつ活動してきました。1998年の12月に準備を始め、1999年2月20日に「ゼロからの出発」と題するシンポジウムを最初の設立記念シンポジウムとして活動が始まり、本年、13年目を迎えています。そのような設立趣旨と経緯を持つ東京自由大学としては、このような時代と事態の中で、2つのシンポジウム「仏教は世界を救うか?」、「シャーマニズムの未来—見えないものの声を聴くワザ」を社会に問うことは、東京自由大学のできる一つの社会貢献であり、使命でもあると思っています。いっそうのご支援をお願い申し上げます。



NPO法人東京自由大学 2011年度特別企画シンポジウム

# シャーマニズムの未来 見えないモノの声を聴くワザ

2011年  
4月23日  
開催(土)



2011年度特別企画シンポジウム「シャーマニズムの未来—見えないモノの声を聴くワザ」が4月23日

(土)、なかのZERO小ホールで開催され、500人

余の人々が来場し満席の熱気に包まれました。第1部は磨赤児&大駱駝艦の「The Butoh—モノ降りしトキ」、第2部は「シンポジウム」の構成でしたが、午前中は「大重潤一郎ドキュメンタリー作品特別上映会」を視聴覚ホールで開催し、こちらも100人余の観客が集い満席状態となりました。

3・11東日本大震災後1ヶ月の人々の問題意識の高さを反映して、「シャーマニズム」の再発見、再評価、未来への展望を切り拓く知と身の饗宴(シンポジウム)に深い関心が寄せられた手応えを強く感じました。東京都中野区教育委員会・読売新聞社・東京新聞・毎日新聞社・朝日新聞社・(株)角川学芸出版の後援、株式会社サンレーの協賛をいただきましたことを感謝申し上げます。

NPO法人東京自由大学 2011年度特別企画シンポジウム

「シャーマニズムの未来—見えないモノの声を聴くワザ」

「大重潤一郎 ドキュメンタリー作品特別上映会」		なかのZERO視聴覚ホール本館B2
9:40(開場)～	予告編上映	
10:00(上映開始)～11:45(終了)	「水の心」(30分) 「久高オデッセイ第二部 生章 2011年完成版」(73分) ……神の島・久高島の現在と未来を撮る	

「シャーマニズムの未来—見えないモノの声を聴くワザ」		なかのZERO小ホール西館
13:00～13:45	第1部：The Butoh「モノ降りしトキ」 大物主の神を祀る日本最古の聖地・三輪山の麓で育った磨赤児の原体験を元に… 舞踏：磨赤児&大駱駝艦(我妻恵美子、高桑晶子、鉾久奈緒美、ヤン・ジョンエ) 音楽：新実徳英「始源の光」 法螺貝/石笛/横笛/神楽鈴/声：鎌田東二	
13:45～14:00	休憩15分	
14:00～16:00	基調講演：「シャーマニズムの力」佐々木宏幹(メッセージ代読：鎌田東二) パネリスト：小松和彦・鶴岡真弓・松岡心平・岡野玲子	
16:00～16:15	休憩15分	
16:15～17:30	第3部シンポジウム(後半) コメンテーター参加：磨赤児・新実徳英・大重潤一郎 ディスカッション：パネリスト+コメンテーター全員	

ぬまで赤子でいられることが、オレたちの特権なんだ。その特権と引き換えに、いけにえとなり、目に見えぬ何かに踊りを献上する。大きさにいえばそれも星の営みの一部なんだと思う。」(朝日新聞紙面より引用。改行は省略)。繊細かつ明確な言葉で自らの舞踏を語る麿氏と、「モノ降りしトキ」舞台上で我が身を晒す麿氏と、そしていまこのシンポジウムのパイプ椅子に座っている「怪人」の麿氏。三つの姿がびったりと重なり合ったかと思う次の瞬間にばらばらになる。

## ▶新実徳英



「天籟を聞こうとするんだ」。作曲の仕事を問われたときに、新実氏はこのように答えるという。「天籟を聞く」という行為は、自らの体験の集積から何かを引き出してくるようなことではない。解剖学者の三木成夫がいうところの「生命記憶（太古からの諸生命の記憶）」に触れるような体験なのだ。「天籟を聞く」才能に秀でた作曲家といえばやはりモーツァルトだと新実氏はいう。写譜屋が譜面を写すのと同じスピードで作曲を行ったといわれるモーツァルトには、おそらく考える時間は必要なかったのだ。「天籟を聞く」ための非常に優れた器をモーツァルトは持っていたのであろうと氏は推測する。「天籟を聞く」ためには、できるだけ自分を空っぽにすることが重要。だから自身に天籟が訪れないときには、半覚半睡の状態で待つのだという。震災以降、茫然自失の日々を過ごした。そしてそのあとに「悲しみ」と「怒り」が沸いてきた。津波を描くことはできないが、津波の恐怖や大自然の脅威、そこから生まれた「悲しみ」や「怒り」を、表現者は自分の表現のなかに取り込まなくてはいけない、それが表現者の役目なのだと感じ、作曲活動を再開したと語る。シンポジウム後半部の発言では、今こそ産業革命以来の人間中心主義と、アジアが伝統的に持っている自然中心主義の理想的なバランスを本気で探らなくてはいけない。このような探求はこれまでも行われてこなかったわけではないが、本気でやってこなかった部分があったのではないかとの見解が示された。新実氏は震災後、被災された福島の詩人和光亮氏とのコラボレーションによって多数の作品を生み出している。それら作品は映像として現在YouTube上にアップロードされている。Googleなどで「つぶてソング」と入力して検索すれば、誰でも新実氏の作品に触れることができる。是非ご覧いただきたい。

## ▶大重潤一郎



「久高オデッセイ」撮影時の久高島でのエピソードが冒頭に語られた。久高島のある女性は祭りが始まると、それまで一回も打ち合わせをしていなくても、自然に祭りで求められる所作ができちゃう、と語ったという。この「自然にできちゃう」状態はシャーマニズム的だとも文化的遺伝子（のなせるワザ）ともみることができであろうと大重氏は考える。シャーマニズムの色彩がより濃厚な事例がこの後に続く。久高島では数年前に、若い女性の神役が生まれた。彼女はファーガナシーの神（久高島の子孫繁栄の女神）に憑依された。そして若い女性がけいして知り得ないような久高島の昔の出来事を蕩々と語った。島の人びとはこの突然の出来事を当然のように受け容れているという。

大重氏自身のシャーマンの体験も語られた。久高島は小さい島なので、情報伝達の手段がなくても生まれながらの島民はみな島の隅々まで知っている。しかし島の外からやってきた大重氏率いる撮影クルーにはそのようなわけにはいかない。いざ島に上陸しても何処に撮影すべき対象があるのかわからなくて、当初は途方に暮れていた。しかしだんだんと自らの足がけ向く方向に進んでいくと、自然と目の前に撮影対象があらわれるようになってきたと語る。

「光りの島（1995）」「風の島（1996）」の撮影で、八重山群島の新城（パナリ島）に行ったときのエピソードも紹介された。当時この島は無人島であった。しかし大重氏の眼には、昔の島民の生活の様子が見えた。同行した沖縄の陶芸家大嶺實清氏も同様のビジョンを見たという。そこで大重氏は、これは「ここで映像を録れ」ということだなどと判断し、撮影を開始したという。阪神・淡路大震災の時、「自分の生命が時間をふっわーっと遡るような」感覚をおぼえた大重氏は語る。当時の震災を、人類の行きすぎた行いにたいしての警鐘と捉えた人たちも、時の流れの中でそのことを忘れていってしまったのではないか。今回の東日本大震災は再びこのことを呼び起こさせることになったのではないか。震災を「大きい学び」と捉えて我々はこれから生きていかななくてはならないだろうと、言葉を結んだ。

シンポジウム要約：加藤之晴（副実行委員長）

る。この「のど」のおかげで能管は「ひしぎ」と呼ばれる甲高い叫び声のような音、あえて音程を崩した「原始の音、シャーマニスティックな音」を生み出すことができる。現代の能は、一般の人にとっては敷居が高いものとして捉えられていることが多い。しかし能が持っているシャーマニスティックな原形質は世阿弥の時代においても、そして現代においてもなお息づいているし、強い力を放っている。この力をより発揮させるべく尽力していきたい、という言葉で松岡氏は発言を締め括った。

## ▶岡野玲子



「今日は小松先生の研究の餌食になるつもりでやってきました」と開口一番。「今の時期でないとお話できないこと」という前置きに続いて語られるエピソードのなかには確かに、シャーマニズムを「実践する側」でなければ語り得ない、不思議な、それでいながら強烈なりアリティに裏付けられた、「見えないモノ・見えない世界」との交感の場面があった。昨年六月、国立劇場で雄勝法印神楽を観覧し、その「楽しさ、優しさ、気高さ」に魅了された岡野氏。雄勝法印神楽は宮城県石巻市雄勝町の人びとが伝えてきた神楽で、羽黒派修験が一子相伝で伝えてきたという伝承がある。神楽の演出「橋引」には、人と自然との感応の姿がありありと描かれていた。岡野氏はいつか雄勝に赴いて現地で神楽を堪能したいと思っていたが、果たせぬまま月日がめぐり3月11日の大震災が起きた。雄勝町はこの震災で壊滅的な被害を被ってしまった。

震災発生時、岡野氏は「陰陽師 玉手匣」の執筆に取り組んでいた。震災のショックは大きく、しばらくは筆が止まったが、春分の日前後から少しずつ執筆を再開した。そんなとき、自らの描く「陰陽師」主人公が「雄勝…雄勝…」と語りかけてきたという。その声に従って、震災後も生かされていた雄勝法印神楽のサイトを発見し、神楽師とのメールのやり取りが始まったその経緯を述べた。岡野氏は、自然と人間の文明が離れてしまった現代においてもう一度結ぶための一つの方法として、法印神楽は有効ではないかと思っていると語る。震災によって大きなダメージを被った雄勝法印神楽を再び多くの人びとに知ってもらうために、現在岡野氏は復興への支援を求めている。

シンポジウム後半、福島原発についての岡野氏の発言は我々に大きな衝撃を与えた。原発事故発生後、岡野氏は「原発にも御霊がある」と思い、原発に祈りを捧げた。するとその御霊には人間と同じように年齢も性別もあることがわかった。そこには制御できない巨大なエネルギーを自らが放出していることと、それによって人びとから疎まれていことに戸惑い、悲しみ、傷ついている男の子の姿があったという。

岡野氏は語る。「確かに今は原発事故で日本は大変なことになっている。けれどこの原発には「魂」が存在している。このことを是非感じて、知って、この会場を後にして欲しい」。氏の発言は、シャーマニズムの根幹にある「共苦共感」の世界観が現代社会にもたらす意義を、改めて我々に強く、そしてリアルに問いかけることになった。

## ▶麿赤兒



「ポロポロポロ」が「ぐっだだだだぎー」になる。と、新実氏の奏でるピアノの音を表現した麿氏。楽器が持つももとの音を超越した音を生み出す新実氏を「楽器の拘束を越境してしまいたい欲望（カルマ）を持った方かな」と評した。対して自らが長年専心してきた舞踏については「良い音楽があれば、手を振っても足を上げて何となく神秘的に見える」「ホンモノといえはホンモノ、ニセモノといえはニセモノ」と、謙遜とも謙遜ともとれる発言で会場を沸かせた。文脈のスキを縫うようにして放たれた「生まれ変わったら虫になりたい」という氏の言葉は、我々を混沌と困惑の淵に落とし込むために放たれた罠だったのだろうか。「なーんちゃって（シンポジウムにおける麿氏の発言より引用）」。

シンポジウム同日に朝日新聞に掲載された麿氏の発言「いまこそ歌舞音楽」が鎌田氏によって読み上げられた。「野分きや台風がパーンと来て、またイチから始める。そんなことを繰り返し、日本人は偉いもの、滅びゆくものに対する繊細な感性を培ってきた。舞踏ってのは、自然を受け入れるそういう文化の中で生まれた。自然に対する人間の漠然たるセンサーが感知したものを、言葉に変換せず、そのまま出すのが踊りや音楽。でも、現代社会の過剰な情報がそのセンサーを摩耗させている。だから、多様な見方が可能なのに、一方的に合理性を押しつけてすぐ否定する、ということが起きてくる。踊り手は皮膚感覚で世界とダイレクトにつながっている。死

# シャーマニズムの未来

見えないモノの声を聴くワザ



はじめに、シンポジウムの冒頭に予定されていた佐々木宏幹氏による基調講演が同氏の体調不良によって果たされなくなってしまった旨が、司会者である鎌田東二氏から伝えられた。代わりに佐々木氏からの会場の人びとに向けてのメッセージが、鎌田氏によって読み上げられた（特集4ページ参照）。

## ▶小松和彦



シャーマニズムを研究対象として捉えるか、それとも自身の実践として捉えるか。シャーマニズムに強い興味があるといっても、その関わり方は様ではない。本日のパネリスト及びコメンテーターには、シャーマニズムに対しての関わり方が大きく異なる二種類の立場があることを指摘（シャーマニズムを「研究対象」と捉えるか、あるいは「実践スタイル」と捉えるか）したうえで、小松氏は自らを、シャーマニズムを研究対象としてとらえる「普通の人」と規定した。この発言は、会場の人びとに、これから続く各パネリストの発言をより深く理解するための一つの指標を示したといえるだろう。

本シンポジウムのサブタイトル「見えないモノの声を聴くワザ」を踏まえて、小松氏は「見えない異界を見るワザ」もシャーマニズムの大きな柱ではないかと主張した。シャーマンには、普通の人には見ることのできない「異界」を覗きあるいは立ち入り、その「異界」の様子を鮮明に伝えることができる「力」がある。たとえば日本の山伏（修験者）たちは、護法を操り、天狗との激しい戦いを繰り広げるといったような、衆生の災厄を取り除くために繰り広げられる、自身の生々しい「体験」を人びとに語り伝えることができる。

このような「力」を持った人物（シャーマン）がいて、そこで語られた「異界」の様子を、より広くより後世に伝わるスタイルで伝えることのできる人たちがいる。絵画や演劇など芸術に携わる人びとである。シャーマン自身の語りや、芸術家の作品を通して、シャーマンが見た「異界」の姿は、普通の人びとが持っているコスモロジー（宇宙論・世界観）に大きな影響を与えることになる。小松氏がシャーマニズムの要点として「見えない異界を見るワザ」を主張する理由はここにあった。カタルシスの語源である「カタルマ」、ファーマシーの語源である「ファルマコン」。共同体と個人双方の災厄祓除を意味する、この古代ギリシアの二つの言葉のいずれにもシャーマンは深く関わっているという。これを端的な例として、小松氏はシャーマンは共同体レベル・個人レベルの双方に対応する宗教者であり、シャーマンがシャーマンたり得る根源は普通の人々が持ち得ない「力」を持っていることにあると主張した。そして、この「力」の根源を探求していくことが、シャーマニズム研究における要点であることを指摘した。

## ▶鶴岡真弓



3月11日の東日本大震災を経験した我々に向けて、「「私たちは地球の遺族なんだ」ということを意識すべきときを迎えている」と鶴岡氏は語る。「遺族」は英語では「survivor=生き残った者」であると同時に「remain=取り遺された者」でもある。では我々は何に取り遺されたのか。

ここで鶴岡氏は旧約聖書の「ヨブ記」を引き合いに出す。何不自由ない「イエー!」（シンポジウムにおける鶴岡氏の発言より引用）」と叫びたくなるような幸せな日々を送っていたヨブのもとに、あるときから突然曇みかけるように災いが襲いかかる。「ヨブ記」に描かれているのは、突然の災厄に翻弄される人間の姿である。災厄は本来人間の側からはどうにも「説明のつかないもの」として立ち現れる。大切なのは、この「説明のつかない」災厄に晒されている人間が、「一滴の大河の知慧」を絞り出して、その苦しみの場に挑むことな

のだと、鶴岡氏は強く訴えかける。

これまで「ヨブ記」は我々には理解しがたい、一神教が持つ特有の「厳しさ」を描いている作品だと解釈されてきた。しかし、いままさに大震災という、この地上からは説明のつかない災厄に翻弄されている渦中の我々にとって、人間にとっての不可抗力を主題とし、それを生き抜こうとする「ヨブ」の物語は大きな意味を伝えていと鶴岡氏は主張する。

以上のような重々しい言葉で語られた「前置き」に続いて、「シベリア極東世界からケルト極西世界を貫く精霊信仰とシャーマニズム」を読み解く事例として、黒澤明の映画「デルス・ウザーラ」と宮崎駿のアニメが紹介された。

鶴岡氏によると、「デルス・ウザーラ」と宮崎アニメには共通する要素があるという。「デルス・ウザーラ」も宮崎アニメも、狩人や子どもたちにとって「親しい存在」にして「優しきもの」として描いている。しかし両者において、自然に向けるこの「親しさ」「優しさ」の感覚は、自然をほんとうに「こわーい（鶴岡氏の発言より引用）」もの、「畏怖すべき存在」として捉える研ぎ澄まされた感覚と常に対をなして描かれている。宮崎アニメには、優しい少年・少女・小動物が登場する。しかしその背後には常に「あやかし（妖）」の、「名付けられない」精霊たちの存在がある。

われわれが「地球の遺族」とならないためには、地球に向けての熱い「親しみ」が不可欠なであり、そして（親しみの、優しさの）光は、深い闇を知る人にもみ届けられるのだと鶴岡氏は静かに語った。

## ▶松岡心平



「優しく怖い存在」という鶴岡氏の言葉を受けて、この「優しく怖い存在」に深く関わってきたのが芸能者、とくに能の前身とされる猿楽を演じる人びとであり、彼らの使命は「優しく怖い存在」の力を入びとに振り向けることにあった、と松岡氏は冒頭に語った。

能とシャーマニズムとの関係を語るうえで松岡氏が最初に提示したのは、「後戸」と呼ばれる特殊な空間についてのエピソードであった。後戸とは、寺社において本尊が祀られている場所の背面に設けられた空間を指す。後戸には本尊とは別の神仏が秘仏・秘神として祀られていることが多い。

世阿弥自身は強いシャーマンの特質を備えていたものの、表現においてはより生々しさを抑えた普遍的なかたちを求めていた。その結果として生まれたのが、ワキの夢のなかに霊があらわれる「複式夢幻能」の形態ではなかったかと松岡氏は推測する。

世阿弥の著した「風姿花伝」をみると、世阿弥が自身のルーツを二つの物語に求めていたことがわかる。一つは神道における、天之岩戸での天鈿女命の神がかりの舞。そしてもう一つは、祇園精舎にて釈迦が説法をするとき、後戸で歌舞音楽を繰り広げることで説法を聞かない外道たちを鎮めたという仏教説話のエピソードであった。

さらに、能の舞台において使われる笛、能管について。この楽器の奏でる音色の秘密が語られた。能管は雅楽の笛のもとに作られたものであるが、雅楽の笛と大きく異なるのは、吹口と指孔の間に「のど」と呼ばれる竹の管が仕込まれているとこにあ